

司会：今年はですね、5月今日から6、7、8、9、10、11、そして、12月を除いて1、2、3なんと年間通年で全10回の館長講座を開くことができるようになっております。1時30分から3時という開会の時間は変わりません。ただ、日時と言いますか、あの大体基本的には月の第三第四土曜日を設定しておりますけれども、若干の動きがございますので、皆様、開会の日程についてはご注意頂ければというふうに思います。

この館長講座ですけれども、今年のテーマは『博物館のトリビア』、まあ、トリビアっていうと、テレビ番組でも前、ありましたけれども、何だろうかという聞き慣れない言葉でもあるのですけれども、いわゆる雑学とか豆知識、博物館についての雑学、豆知識ということについてのお話になります。テーマとしては、第1回の今日は博物館という言葉について、付け足して考古学と発掘って書いてますね。実は私もこれから館長、どんな話をするのか分からないというので非常に楽しみにしているところでもありますけれども、館長は考古学専攻でございますので、そういう話も出て来るのかなあというふうに思っております。

それから館長ですけれども、この間まで大学の先生、東京のお茶の水女子大学の教授をしておりましたので、この『博物館のトリビア』館長講座に付きましては、大学のオープンキャンパス的な公開講座的な雰囲気もあるのかな、というふうに思います。皆さんには、そんな感じで気楽に聴いて頂ければというふうに思っていますけれども、これから3月までどうぞ皆さんご期待頂いて、毎回、ご参加頂けますよう、どうぞよろしくお願い致します。

それでは第1回目の館長講座を始めたいと思いますので、館長、どうぞよろしくお願い致します。

(拍手)

館長：はい、どうもはじめまして。鷹野と申します。只今、簡単にご紹介頂いたのですが、最初にちょっと自己紹介いたします。

ちょうど66歳になったばかりというところですが、大学では考古学をやっております、もともとお前の専門は何だと言われますと縄紋土器かな、というふうに思います。特に縄紋時代の晩期の土器のことをやっております、これはあの、縄紋土器の中心といいますとなんとと言っても東北地方ですけれども、私は関東の片隅に居りましたので、関東地方での晩期の土器ということになります。最初に就職したのが千葉県の市原市の教育委員会。もう34年前になりますが、1981年からお茶の水女子大学に就職致しまして、ここでは考古学ではなくて博物館学というのを担当しておりました。専門は縄紋なのですけれども、海外調査に随分駆り出されまして、最初に出かけたのは、私の生涯で最初に飛行機に乗って外国に出かけたときでイランでの発掘調査でした。このときは私にとってはカルチャーショックで済まなかった思いをしたのですが、時代の節目で成田空港が開港した年です。1978

年の 4 月開港のはずが、覚えていらっしゃる方もおられると思いますけど管制塔に過激派が乗り込んで管制塔壊しちゃったものだから、開港が 2 か月近く遅れて、その 6 月、開港直後に出かけました。それからイタリアの調査に長く関わっているのですが、イタリアの調査に初めて出かけたのは 1985 年の 8 月で、その時はイタリアのローマに着いたその日に日航ジャンボ機が墜落したという、忘れられない思い出があります。それでまあ、この 3 月に退職しまして、ここの博物館にお世話になった次第です。

ところで、本題に入りますが、博物館という言葉、これは、英語では^{ミュージアム}museumと書かれますけれども、^{ミュージアム}museumという言葉の語源となった言葉がありまして、それがギリシャ語で^{ムゼイオン}mouseion。ギリシャ語ならギリシャ語で書かなきゃならないのかもしれませんが、まあ、英語で記しました。この mouseion とは何かって言いますと、ギリシャ語で芸術とか文芸とか、そういった美の神ミューズという神様が居るのですけれども、そのミューズに捧げる神殿を mouseion と呼んでいました。この mouseion という名前が、紀元前 300 年、エジプトのアレキサンドリア、当時の^{おうさま}王様Ptolemaios Iですけれども、この Ptolemaios I が mouseion という名前を付けた施設を造る。これは、アレキサンドリアの神殿の一部が充てられておりまして、広間があったり、それから、動物が飼われていたり、植物が並べられていたり、哲学者の彫刻があったりですね、象牙とか動物の毛皮とか、そんなものまで置かれていたと言います。その置かれていた物も一種の博物館的なものなのですけれども、実態は、そういうものによって教育をする、神官たちの教育機関という意味合いのものだったようです。アレキサンドリアが、ローマに席捲されてからだんだん衰えていきまして、4 世紀の終わり頃には無くなったという風に言われています。

この^{ミュージアム}museumという言葉が、実際に博物館を指すようになってきたのが大体ルネッサンス期頃から 14 世紀から 16 世紀位にかけてで、イタリアで興っていたルネッサンス、文芸復興と呼んでいますけれども、その頃から博物館に相当するものに^{ミュージアム}museumという言葉が充てられるようになって来ました。それ以前はどうなっていたのかと伺いますと、ここにも書きましたけれども、貯蔵所だとかですね、廊下とか部屋とか、棚とかですね、そういうような言葉で、要するに物が置かれている場所を示す言葉なのですね。それらに相当する言葉で、かなりまちまちに呼ばれていたようです。それから、収集されていた物やそれを置いている場所にも^{ミュージアム}museumに相当する各国の言葉が使われるようになったようです。この^{ミュージアム}museumという言葉が日本に入って来てどうなったのか、よく言われていたのが、^{ミュージアム}museumという言葉は、これは下に書いてある^{たなかよしお}田中芳男という人が翻訳して作ったというふうに言われている言葉だということでした。

そう言われてみると明治維新の頃の人、何か今の我々が及びもつかないような感覚を持っていたようで、いろいろ言葉を作ってくれたのですね。これは一例として挙げたのですけれども、こんな言葉まで日本で作ったの、というのがあります。野球もそうですね。野球のやり方を考えると、なんで野の球になるんだろうと思うのですけれども、ベースボ

ールって言ったらベースがあってそのベースをめぐってのボールのやりとりで、ちょっと違ったかなあと思うのですが、非常にうまい言葉、あの、野原に行ってやるとか、ベースを使ってやるということから、ああいう言葉になったのでしょうかね。

野球もそうですけど、もともとあった漢字を組み合わせて作った言葉がありまして。この中では哲学とか文明とか科学、これはもともとあった漢字を使って作った。それからもともとある漢語に新しい意味を付け加えたのが、自由だとか革命なんて言う言葉もそうなのですがそういうような使われ方がありました。

ところで今、非常に困っているのは、教育という言葉でして、この講座の話の中でもおいおいお話ししていくのですが、博物館は教育機関でもあるんだということですね。でも、教育機関っていうとすごく硬いイメージを持ってしまわないか。学校教育という言葉もあります通り、学校の先生が物を教えるのが教育だって、そういうイメージがあるので、博物館でやる教育ってそれとは違うんじゃないかって思っています、もっと何か教育に代わる言葉はないかなあ、とずっと思っています。残念ながら明治維新の頃の人達の知恵には、到底及びもつかないものと思っています。

ところで、ここに書いてある田中芳男^{たなかよしお}という人は、大阪舎密局^{おおさかしかけみきょく}、これは何かと言うと理化学研究所みたいなもの、現在の京都大学理学部の前身になる組織なのですが、それを作ろうという計画のときに、これには研究所と言うより博物館と名前を付けたほうが良いと提案をしています。田中芳男^{たなかよしお}がなぜそんなことを言い出したのかというのは、おいおいお話しをしていきます。

その田中芳男^{たなかよしお}がそのような提案をするに至ったのは、やはりその前に博物館という言葉が当時の知識人の間では、かなり共有されていたのではないかと、そういうことが想像される訳ですね。当時の知識人という人達は、江戸時代の末期で、幕末の知識人、その代表的な一群というのが、幕末に幕府から派遣される欧米への使節団に加わって行く人達、特に通訳なんかの人達であるわけです。この江戸幕府の使節団は欧米に派遣されて欧米の近代的な文化に触れて来るわけです。この使節団にはいろいろな役割があったわけですね。批准書の交換だとか、外交の工作だとか、いろんな役割がありましたけれども、そういった本来の任務の他に外国に行っているいろんな施設を見聞して来る。そして、欧米の文化に触れてくる。で、その彼らが見てきた施設の中には今日で言う博物館があり、また博物館的な施設もいろいろなところで見て来たことが、使節団の人々が残した日記だとか紀行文の中には見られます。

万延元年^{まんえん}の遣米使節、アメリカに行ったやつですね、これは、日米修好通商条約を結ぶので、その批准書を交換しようということで行って、勝海舟の咸臨丸がこの時一緒に行っています。咸臨丸は太平洋を横断しただけですけども、この使節団の一行は更に大陸を横断して、ワシントンまで行っています。それから、文久2年の使節団竹内保徳一行、これに福沢諭吉などの名前が出てきますが、福沢諭吉はこれにも加わっています。福沢諭吉はその前の万延元年^{まんえん}の遣米使節にも咸臨丸にちゃっかり乗っかって行っている訳ですけど

ども。それからその後、博物館に係るのは、1967（慶応 3）年のパリの万国博覧会に参加した一行。これは江戸幕府代表で行った連中で、このパリ万博には、実は日本政府の名前で 3 つ出ています。一つは今の江戸幕府ですね。その他にも薩摩藩、加賀藩、これが別々に日本代表として行っているのですね。こちらが本家だと言ってパリで争っていた訳ですけれども、幕府の代表団の中に田中芳男たなかよしおは加わっていました。

まず万延元年の日米修好条約批准の為の使節団ですけれども、使節の正使が新見豊前守にいみ ぶぜんのかみ正興まさおき、副使が村垣淡路守範正むらがきあわじかみのりまさ。一行は 77 人。ワシントンに 26 日間滞在してしまして、その間に大統領に謁見をすとか、それから、批准書を交換すとかしまして、その合間に海外事情の視察ということでいろんな施設を見学しています。

見学をした施設の中で特筆されるのが、ここに書いてある Patent Office と Smithsonian Institutionバテント オフィス スミソニアン インスティテューションという施設が含まれていたことです。日本人としては初めてこれらを見学したということなのですから、これがどういう目的を持ったどんな施設なのかということが理解できなかった人もいたようですし、一方我が国の類似するものと対比しながら、目的や違いを検討するといった人たちもありまして、見学した時の理解と反応は様々であったようです。ちょっと例を挙げましたけれども、「百物館」「器械局」「物品館」「宝蔵」「博物所」「諸国物品館」、副使の村垣淡路守範正むらがきあわじかみのりまさは、「パテントオヒース」と書いたり、「百物館」と書いたり、次の名村五八郎なむらごはちろう、これは次の主役ですので取っておきまして、玉虫左太夫たまむしきだゆうやすしげ誼茂この人は元仙台藩士で、この時、脱藩していたのですが、この使節団から帰った後に許されました。仙台の養賢堂の学頭役、かなり偉い地位まで行きました。幕末の奥羽列藩同盟の為に働きまして、残念ながら負けてしまうという経緯もありました。玉虫は処分を受けました。あと、Smithsonian Institutionスミソニアン インスティテューション、スミソニアン博物館、ワシントンにある訳ですけれども、アメリカで国立の博物館というとスミソニアン博物館、その中で有名なのが世界で一番人が入るといって航空宇宙博物館で、博物館群がずらっと並んでいますが、スミソニアン博物館のどこを見たのかという記録はないのですけれども、大きくてびっくりしたなあ、で終わっちゃう方もいました。

この名村五八郎なむらごはちろうなのですが、『亜行日記』という日記というか、記録を残しています。この人は、通訳として加わってしまして、この名村五八郎の残した『亜行日記』の中に、文章はそのままなのですが、「当所 博物館バテントオヒスニ到り、其掛り官吏ニ面会諸物一見ス」という記載があります。ここで、この、博物館という漢字の 3 文字があり、横に「パテントオヒス」とカタカナでルビがふってあります。ですからまさに、Patent Officeバテント オフィスを見て、彼はそれを博物館として紹介したんだ、ということがわかります。これが、日本人が記載した博物館という言葉の始まりです。初めて、日本人で博物館という名前を使ったのが名村五八郎だということです。名村五八郎については、この使節団の副使である外国奉行兼函館奉行の村垣範正が遣米使節の副使になられたので、村垣が名村を通訳として連れていった、という形のように。名村五八郎なのですが、文政 9 年に生まれ、明治 9 年に亡くなっています。もともと、オランダ通詞の家に生まれてしまして、名村五八郎は、オランダ語は

もとより、英語、ロシア語、それから、漢学にも通じていたようです。英語も良くできたのですね。そういったところから村垣が連れて行ったのだらうと。実際、万延元年の日米通商条約の条文の和訳にもあたっていたと思われる人で、村垣淡路守のもとで通訳として働いていたようです。

この写真はですね、名村五八郎の写真ですが、これは、1982年の6月にハワイのビショップ博物館で発見された写真です。もしかすると日本人で最初に撮られた写真なのかなとも言われているくらい。この頃から幕末の人達の顔写真も出てくるのですけれども。ちなみに、今日は博物館のあちこちに私の似顔絵が貼られて、嬉しいやら恥ずかしい思いをしながら、これが一年間続くと思うと勘弁してほしい、と思っちゃいけないのですけれども、それはそれで結構(笑)。

パリの万国博覧会の使節なのですが、この時の団長が徳川昭武^{とくがわあきたけ}、幕末の最後の将軍徳川慶喜の弟です。最後の水戸藩主でもあるのですけれども、彼がまだ13か14くらいで団長に就いているのですが、江戸幕府は無くなると自分では思っていませんでしたから、彼をヨーロッパにやって、留学させて、少し勉強させてやろうというつもりも有ってこの使節団の団長というようにしておったようなのですが、残念ながらこの直後、幕府は無くなってしまうので、長く留学することなく帰ってしまいます。それから、こっち側の人、これは渋沢栄一。渋沢栄一はこの時、使節団全体の会計係だったそうで、何かえらく苦勞したんだそうですが、この時も渋沢栄一も田中芳男もただ行くだけでなく、万博だけでなく、ヨーロッパのさまざまなものに触れて自分の知識としていました。渋沢栄一のその後の活躍、経済界の大きな活躍というのは、ご存じと思います。田中芳男の方なのですが、ヨーロッパの博物館施設を多数、視察して来ています。元々は、どういった方かという、本草学、本草学という、博物学になってしまうのですが、江戸時代の末近くになると、博物学という分野で、いろんなものに関心を持って研究するという人が出てきます。平賀源内なんて、代表だと思えるのですけれども、その博物学、本草学の中で育って来た人で、文久3年、23歳の時に江戸に出て来て、当時の幕府の開成所^{かいせいじよ}に勤めました。幕府の中の役所、役所というか、まあ、外国の人なんかを調査したりするところに勤める訳です。

その中で慶応3年1867年にパリ万博に出かけまして、そこでまあ、いろんなものを見てくる中で博物館というものの必要性を認識し、彼なりの博物館ってこういうものだね、という思いを持って帰るのですね。そのことを始めとしまして、再三海外に出かけては特に海外の農業事情に見聞を広げてきます。その彼が得た農業に関する知識というものを、国内の農家に紹介する、これは、いろんな博覧会を通して紹介するとかしていたようだけれども、現在、田中芳男が作った博物館、これが日本に残っている。伊勢神宮の中に、神宮徴古館^{ちようこかん}というところがあるので、その中の農業館、農業についての博物館、田中芳男が作った博物館として残っています。この建物は登録文化財になっていて、中に入ると、何でこれが農業館なのと思ったり、いろいろな、農業博物学というものがあるようなのですが。そういった農業に関する貢献といったものと共に、1870年、大学南校物産局^{だいがくなんこうぶつさんきょく}、

これは大学と書いても現在の大学とは違いまして、今の役所にすると、文部科学省といった役所です。その物産局に勤務しまして、ここで博物館に関わるのですね。現在も東京国立博物館、奈良国立博物館、国立科学博物館、それから、元々は博物館の附属施設だった上野動物園、そういったものの開設にも貢献しているわけです。それから、田中自身も第2代目の博物館館長を勤めました。半年余りでそれは辞めてしまうのですけれども、そういうふうに博物館でいろいろ貢献した人です。名村五八郎の『亜行日記』が見つかる前、『亜行日記』の記述が明らかになる前は、とにかく田中芳男がミュージアムを博物館と訳したんだ、というふうに言われていたくらい関わりを持っていた。他にも、動物、動物と言うか生物を分類するのに、綱とか「こう」って「つな」という字、目とか、科とか、属とか、そういう言葉がありますけれども、綱、目、科、属という言葉を作ったというか、訳したのは田中芳男だということです。甲殻類とか爬虫類、こういう言葉も田中芳男が作った。田中自身もそのあと、元老院技官とか、貴族院議員とか、男爵で亡くなっていますが、現在、上野の国立博物館に、田中の肖像が掲げられています。

こうやって、名村五八郎が初めて書いた、博物館という言葉なのですが、これは名村だけがそう思っていたのではなくて、多分、幕末の知識人、特に海外に視察団に加わって行くような人達の間では、博物館という概念というのが広まっていたし、共有化されていたのだらうということが想像されます。

一方幕府の開成所、さっき、田中も勤めた開成所が『英和对訳袖珍辞書』という英和辞典を作っているのですが、これは、今、校正版が『医は仁術』のあの展覧会の中に実物が展示されております。残念ながら、ミュージアムのページは開いてないのですけれども出ております。この辞書の中でミュージアムをどう訳してあるかというのと、「學術の為に設けた場所、学堂書庫などをいう」、そんなふうに翻訳がなされている。翻訳というか、紹介されています。ここで博物館と書かなかったというところからですね、どうも、海外使節団に加わった当時の知識人のグループと、開成所によって国内に残っていた人達の間で、必ずしも知識の共有がなかったのかな、と。もしかしたら、あいつら外国ばかり行って、とでもいうような気分があったのかも知れないなあと、私の勝手な想像ですけれども、そんなことがあったのかも知れません。

では、名村五八郎が博物館という語を自分で考えたのかということについてなのですが、そうとも言い切れない。とういのは、幕末にかなり輸入されたとされる、清の魏源ぎげんという人の書いた『海国図志』かいこくずしという本の中にですね、博物館という言葉が載っていました。私自身はまだ確認していませんけれども、確認した論文があります。

大英博物館、ブリティッシュミュージアム、ちょっと余談ですけれども、何でブリティッシュミュージアムを大英博物館というのでしょうかね。ザ・ブリティッシュというのには「大英」って全然入って来ないのですね。ブリティッシュミュージアム、大英博物館。「英」と言うのがイギリスの代名詞だけれども、イギリスの人達は自分たちの国をユナイテッドキングダム、連合王国、省略する時には、大体、UK、と省略して言うわけですね。それが

なんでグレートブリテンと言うのでしょうかね。グレートブリテン島、今のイギリスの島ですけれども、グレートだから大が付く。では、英は何なんだろう、イングランドの英なのでしょうけれども、イングランドはブリテン島の全部じゃないのですね。最近話題になった、スコットランドが独立するとか何とか。スコットランドはブリテン島の中なのですが。それで、大英博物館って名前、変なんじゃないかな、ってずっと思っていたのですが、一度、調べてみました。一体、いつごろから日本人は大英博物館って、呼ぶのだろう。最初からそう言っていました。最初からというのは、さっきの、使節団が行って、ブリティッシュミュージアムも観ていますけれども、この人たちは最初から、大英博物館と言っていますね。誰が言い始めたかは深く追究してないのですけれども、日本人にとってはブリティッシュミュージアムは、最初から大英博物館というのです。この大英博物館について『海国図誌』のなかに「大書館一所、博物館一所」とある。この大書館というのは、これは、図書館だと思えるのですけれども、ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、20年くらい前まででしょうか、大英博物館には、図書館も一緒にあったのです。例の南方熊楠がここで勉強していたのですが、彼はつまみ出された日本人で、あとはマルクスが勉強していたというような有名な図書館が、中庭にあったのです。それが現在では外に出て行きてしまっている図書館はないのですが。この『海国図誌』には全体として19世紀の前半までの世界情勢というのを記してあるのですが、何でこれが書かれたかと申しますと、清はアヘン戦争などで、特にイギリスなどの強い力を思い知らされて、その時の宰相だった林則徐^{りんそくじょ}という人が、これはもっとヨーロッパなど外国の状況を知らなきゃいかんということで、魏源^{ぎげん}という人にこういうものを書いてもらったというものなんだそうです。つまり、中国の清の人達自身が、外国の事をもっと良く知ろうと思って書いたものである。それが、日本に入ってくる。ちょうど当時の日本の状況にマッチしているのです。そこでこれが非常に良く読まれていた。当時、知識人の間で読まれていましたし、名前を挙げますと、佐久間象山とか、最近話題の吉田松陰とか、そういった多くの読者を得ていたようですし、それから外国の情勢とその頃の日本の情勢を鑑みるという点で、ちょうど激動の時代の起爆剤ともなっていた、というふうに評されています。名村五八郎は、英語やオランダ語だけじゃなくって、英語もロシア語もそして漢語も堪能と言われておりましたが、だとすると、当然名村も読んでいるだろうということが推測できるのです。残念ながら確証はありませんけれども。というところからすると、この辺のところから知識を持って、名村五八郎も博物館という表現をしたのかな、という仮説として、言えると思います。

それが知識人の間で、共有化されていた博物館という言葉と概念で、これがより広く一般的にも広まった、非常に広く普及されてきた、というのは、これは福沢諭吉が書いた『西洋事情』という本によるというところが大きかった、と言われます。この、福沢諭吉が書いた『西洋事情』、これはあの文久2年の竹内使節団に加わって、フランス、イギリス、オランダ、プロシヤ、ポルトガル、ドイツとか、それから、ロシア、こういったところをまわった見聞をもとにして、書いています。この『西洋事情』の初版、一番最初に出た版、

の中で、博物館を紹介しているのですね。実際の文章は、「博物館は世界の物种」、ものだねというのでしょうか、そのまま、読みます。「古物、珍物を集めて人に示し、見聞を博くする為に設くる者なり」。というふうに、博物館ってこういうものだよと紹介しました。さらにそれに続けてですね、その内容をあとで細かく言いますけれども、ミネラロジカルミュージウム・ゾーロジカルミュージウム・動物園・植物園・メディカルミュージウムという種類も紹介しています。で、この本は非常に広く出回ったとされているもので、著者の手によって出版されて販売されたものだけでも 15 万部にも及ぶと見られますし、海賊版も加えますと 20 万から 25 万部は出版されているであろうというふうに言われております。当時の明治 8 年くらいで 25 万部も出た、というのは相当な量です。この本によって、博物館という言葉と概念、これが一般にも広く普及していったのではないかと考えられます。

この、ミネラロジカルミュージウムからなのですけど、この 5 種類を紹介したってことは、博物館の概念、中身はいろいろだよということを示したということなのです。

版によって表現はさまざまですが、「ミネラロジカルミュージウムと言えは、礦品を集むる館なり。およそ世界中、金石の種類はことごとくこれを集め、おのおのその名を記して人に示す」、ここに書いたのは、1969 年に中央公論社から出ました、『日本の名著』というシリーズの中からで、このミネラロジカルミュージウム、中身から言うと、山の鉱物、鉱物学博物館。

次が、ゾーロジカルミュージウム。「禽獣は皮を取り皮中に物を埋めてその形を保ち、魚虫は薬品を用いてそのまま干し固め、みな生き物を見るが如し。小魚虫は火酒に浸せるものもあり。」ゾーロジカルって言ったら、動物学博物館でしょうか。で、「皮を取り皮の中にもものを埋めて」はまさに剥製、標本のことをいっているのですね。動物の剥製標本。それから、「火酒に浸せるものもあり」。火酒^{ひざけ}というのはこれ、アルコールのことですので、アルコール漬けの標本があることも紹介しました。

それから、動物園・植物園。「また、動物園・植物園なるものあり。動物園には生きながら、禽獣魚虫を養えり。」前のゾーロジカルミュージウムと違うのです。「獅子、犀、象、虎、豹、熊、羆、狐、狸、猿、兎、駝鳥、鷲、鷹、鶴、雁、燕、雀、大蛇、蝦蟇、すべて世界中の珍禽奇獣みなこの園内にあらざるものなし。これを養うにはおのおのその性に依りて食物を与え、寒温湿燥の備えをなす。海魚も玻璃器に入れ」、ガラスの器ですね、「ときどき新鮮の海水を与えて生きながら貯えり。」ここまで動物園。これに水族館もあるんだってわかりますね。「その性に依りて食物を与える」、動物ごとに餌を変えるんですね。「植物園にも全世界の樹木草花水草の種類を植え、暖国の草木を養うには、大なる玻璃室を作り、内に鉄管を横たえ、管内に蒸気を通じて温を取る。ゆえにこの玻璃室内は厳冬も常に八十度以上の温気ありて熱帯諸国の草木にてもよく繁殖す。」植物園というのはこれを見ると、ガラスの温室。大なる温室。中が暖房が入っているので、80 度以上、ちょっとびっくりしましたが、華氏 80 度なので。摂氏に直すと、26 度から 27 度くらい、まあ、熱帯の植物がその中に、生育できる環境にあるんだ、ということで温室のある植物園というものを紹介

しました。

それから、5つ目にあげたのが、メディカルミュージウム。メディカルミュージウムとは、「もっぱら医術に属する博物館にて、人体を解剖して、あるいは骸骨を集め、あるいは胎子を取り、あるいは異病にて死する者あればその病の部を切り取り、経験を遺して後日のためにす。この博物館は多く病院の内にあり。」メディカルミュージウム、そのまま訳すと、医学博物館。まさに『医は仁術』展だなあ、というふうに思いました。この展覧会の中には解剖図がありますし、それから、骸骨なのですけれども、標本がありますし、産科人形がありますし、病変の模型も展示されております。もしまご覧になっておられない方があったら、どうぞご覧になって下さい。

こういうふうに、福沢諭吉が博物館というものを紹介しました。これで非常に良く博物館というものが日本人の間では普及したのですが、博物館というのが、一番最初は魏源の博物館という表記があったのですが、それが、中国でも普通の表現だったかというところじゃなくて、中国では博物館ではなくて、博物院の方が最初は普通だったようですね。

ご存知のように、故宮博物院、中国の台北にあって有名ですが、この前、台北の国立故宮博物院の資料が初めて東京国立博物館と九州国立博物館で展示されましたが、その時、最初、国立って文字を外しちゃったのです。それでちょっともめたことがありまして、開館直前、本当にやれるか心配した人もいたのですけれども。この故宮博物院のほか、中国のごく初期の博物館を並べてみたのですけれども、上海に上海博物院それから徐家匯博物院、震旦博物院、という名前があるので、天津博物院・華北博物院、など、みんな博物院って名前が付いていました。上海、徐家匯、震旦って、中国人が作ったものではなくて、上海とか天津は当時、租借地と言いますか、要するに中国の上海とか天津とかほとんど外国人によって占拠されている状態ですけれども、これらは主としてイギリス人、フランス人の手によって、その地域の土地の研究の為に作られた博物館でした。中国人が作った最初の博物館というのは、南通博物院。ここは「苑」で、何で「苑」なのかというと、これは今で言うと、野外博物館的な屋外であったりしますので、これが博物院と言いまして、これが中国人張騫による最初の博物館。南通ってどこかということ、南京の揚子江の対岸にある町で、現在でも南通博物院というのが残っています。

こういうふうに中国では元々は博物館という言葉があったにしても、それが一般的に使われていたと言うのではなくて、むしろ博物院という言葉が、ずっと続いていたのですが、やがて、博物館という言葉が使われるようになった。そのままと言ってもいいと思うのですが、中国でも現在では、博物館という名前を使っているのですね。日本で普及した言葉が中国でも一緒に同じように使われるようになっていったということだろうな、と思いません。

同じような言葉の流れをした、私に関わってきた分野の言葉というのもありまして、これはちょっと『博物館のトリビア』とは別ですけれども、「考古学」という言葉と、「発掘」という言葉を並べてみました。これは、中国考古学者の関野雄先生という方が1968年に

『考古学と発掘』という論文を書いています、それをもとにして、お話いたします。

最初に「考古学」という言葉なのですが、これは日本で明治になってすぐ使われ始めたという訳ではなくて、最初は「古物学」という字が充てられていました。古物学と言うと、なんか夢も情緒もないので、考古学と言うと、「考古学って言う夢があつていいですね」と言われるのですが、「考古学」は漠然と「古」を考える、古を考える学問ですね。考古学って言うのは物だけじゃなくって、遺跡とか、あるいは遺構とか、そういったものを全部含めて研究対象となるので、古物学でなくて良かったと思いますが、ついでに言うと、考古学って名前は、実は変なのです。何で変かと言いますと、例えば、動物学とか植物学にしても、それから、社会学にしても心理学にしても、なんとか学という名前というのは、大体、何研究するかというのが、それで分かりますよね。動物学という、ああ、動物研究するのね、心理学、ああ、人の心理、心理を研究するんだね、「考古学」って何ですか。「考古」は、考古学の研究対象でも何でもないので、「古」を考える学、おかしな命名のされ方をしている学です。それはそれでいいのですけれども、それはおかしいって言うので、かつて、京都に平安博物館という博物館がありましたけれども、その館長さんだった古代学者の角田文衛という方が、「考古学」は名がおかしいから変えるべきだ、じゃ、何にするか、って言ったら、研究対象にする物を名称とすべきだ、というので、「考古学」でなくて、「遺物学」にしよう、というふうに言っていたのですが、それもまた、夢やロマンが無くなってしまふ。まあ、夢やロマンばかりじゃないのですけれども、まあ、遺物学にもならなくて、古物学にもならなくて良かったかというふうにも思ってしまう。

最初は古物学でした。具体的に文献を見ますと、1872（明治 5）年に太政官、今の内閣ですかね、内閣、政府全体です。それからのお達しとして、「古物ノ取締ニ関スル達」というのが出されている。ここに、古物があり、それから、文部省という役所が出来て、その文部省で、まさに文明開化の時代ですから、欧米の知識を普及させようという中で、百科全書を翻訳して出している。この百科全書の中には、Archaeology という本がありまして、その Archaeology という本を翻訳したのが、「古物学」という題名でした。考古学は英語では archaeology だけど、考古学というのは一番最初にやることは何かといいますと、研究対象が見つかなかつたらしょうがないですから、まず遺跡を探すことなのですね。遺跡を探すというのはどうするかというと、まさに歩くのです。現在では、日本列島のほとんどのところで、どこに遺跡があるってことが、分かるような状態になっているけれど、そうなる前は遺跡を探して歩きました。私も北海道でやったことがあります、とにかく歩くのです。下を向いて歩く、だから「アルケオロジー」だね、と実感出来た次第です。

その、archaeology は古物学と訳されました。それから、明治 12 年に、東京の大森貝塚を、エドワード・モースが発掘した結果が、報告書として出されます。モースは明治 9 年に大森貝塚を発掘しているのですが、これの結果をまとめたものが、明治 12 年、『Sell Mounds of Omori』という題名の本を出しています。当初から、モースという人は、とても偉い方で、日本語版を出すってこと考えていまして、そのために、矢田部良吉という東

京大学の教授だった人が口述をしまして、それを寺内章明という人が筆記してできた日本語訳があります。それを見ますと、その題名が『大森介墟古物編』という書物で、古物という言葉が出て来ます。『Sell Mounds of Omori』だと、これをそのまま訳せば「大森貝塚」となるのでしょうかけれども、大森介墟としました。この介の字、変ですけどおんがおなじですから。東京の京浜東北線の線路の脇に 2 カ所大森貝塚の石碑が立っているのですけれども、一つは横長の石碑で「大森貝塚」って書いてある。で、もう一つは縦長の石碑で「大森貝墟」って書いてある石碑があるのです。大森貝墟の方は残念ながらモースが発掘したものではないことがわかっています。とにかく「古物」と書かれていました。

モースは、最初から、こういうふうには日本語と英語と両方出すと、『Sell Mounds of Omori』って、そもそもは、当時の東京大学理学部の研究紀要、研究報告として出版するのです。当時はまだ、大学で海外との研究の交換とかいうような知識がなかった時代で、モースは大学で紀要を作って英文でも作って、それを海外の大学にも送って、それからあちらからまた雑誌を送ってもらう。つまり、雑誌、研究紀要を交換する、そのことによって、日本国内にも大学にも本とか研究材料を充実させていくんだ、ということを教えてくれました。

それから、また、日本をこよなく愛したってことがあるようで、日本の物を、だいたいあっちに持って行っているということあるのですけど、例えば、看板とかですね、それから、陶磁器の大変なコレクションとか作って、現在ボストン美術館やセーラムの美術館にまわってあるのですが、明治のこの頃、町のお店の看板たくさん集めて、持って行きました。それから、関東大震災で当時の東京帝国大学の図書館が壊滅してしまいました。焼けてしまっただけ。それを聞いたモースは、自分の蔵書を全部東京大学にそのまま寄付する、というような人でありました。

この古物学の伝統、まだまだありまして、三宅米吉^{みやけよねきち}って方、この方は、後に考古学会という学会が出来るのですけれども、この考古学会の最初の会長となった方ですが、最初に三宅米吉が明治 19 年に書いた『日本史学提要』の本では、古物学の言葉を使っていますし、明治 27 年に出された本の中でも、まだ古物学という言葉が使われておりました。じゃあ、その古物学でずっといったのかというと、そうじゃないので、考古学という言葉の方も、大体これと並行して使われています。

最初に考古学という言葉が文献に出てきたのが、文部大輔の田中不二麿^{たなかふじまろ}が書いた、大森貝塚出土品天覧の上申書で、天覧ですから天皇に見せる、という時に書いた「大森村古物発見ノ概記」という上申書に書いているのですけれども、その中に、「考古学ノ世ニ明ラカナラザルヤ久シ サキニ漸ク古物学ノ一派欧米各国起コリシヨリ…」うんぬんかんぬん、という言葉があつて、考古学と古物学を併用してますけれども、これが最初の考古学の語として出たのです。この田中不二麿は官僚ですので、考古学って言葉、どの程度自分で考えたのか、自分で書いているか、わかりませんので、下の役人が書いているかも知れませんけれども、とにかく、文献上出てくるのはこれが最初。

一般の書の中では、1879年に^{ハインリッヒ フォン シーボルト}Heinrich von Siobold、これはあの江戸時代に日本にやって来た有名なシーボルトの息子です。この Heinrich von Siobold が書いた本を吉田正春という人が訳してですね、『考古説略』という題で出版しています。この吉田正春は土佐藩で暗殺された^{よしだとうふう}吉田東洋、幕末の志士として名前が出て来るのですけれども、この息子です。その後、同じ外交官になっていくわけですが、『考古説略』という本がかなり広く回っています。民間の素封家達の間にも良く求められていたようで、非常に良く出回っていますし、私、この実物を図書館でなくて、最初に就職した市原市の古くから伝わる庄屋さんの家系の家で、これだよ、って見せられたのが、『考古説略』でした。

それから太政官で出している達しの中でも、考古学という言葉になって来ています。最初明治5年の段階では古物って言うたのですけれども、明治15年になると、考古学の語を使うようになりました。「文部省所轄東京大学ニ於テ考古学研究ノタメ教員学生等ヲ各地へ派遣シ…」うんぬん、という達しがあります。要するに東京大学の学生たちが調査に出かけるから便宜を計らえ、とそういう達しなので、その中に考古学の語が書かれるし、それから明治19年に出来た人類学会、これは現在の日本人類学会に続いている学会がありますが、この学会の機関誌「人類学報告」の中で、考古学を使っています。何で人類学で考古学なの、って思うかも知れませんが、この頃の人類学というのは、人に関する事は何でも研究する、扱うというのが人類学でした。それから、もちろん歴史もあります。歴史の中には、その、今の考古学で使う物もあります。それから民俗学的な、今現在生活している人たちについて、それからもう一つ解剖学的な研究もあったりしました。そういうわけで、この明治時代の「人類学雑誌」には、どちらかというところ、今日の考古学的なものが主流で、日本人の起源論について、発掘の報告とか、こういったものが、しばしば出ています。この人類学会の中から、先程紹介しました考古学会が分かれていくことになります。1895年に考古学会が設立されましたし、翌年から「考古学会雑誌」が刊行されて現在に至っている。もうこれ以後は、考古学という言葉だけが世の中では使われるようになる。

考古学といったら、古を考える学という意味のもとと中国ではあった言葉で、中国で考古学関係の書物の中で、この考古学って言葉、言葉というか漢字で3文字ですね、これが使われるようになるのは、最初の段階からだったのではないかと。1923年に^{アンダーソン}Anderssonという人の書いた‘An Early Chinese Culture’と‘The Cave-Deposit at Sha Kuo Tun in Fentien’、これを^{えんかくれい}袁復礼という方が中国語訳をしまして、それぞれ『中華遠古之文化』『奉天錦西県沙鍋屯洞穴層』、とそのままですけど、翻訳して出版している。で、この中で袁復礼が archaeology を考古学というふう^{いにしえ}に翻訳している。これは日本語の影響というか日本語から輸入された言葉として使っていることが考えられる。そうはいつでも「考古」は「古^{いにしえ}を考える」ですから、中国の中にあってもやっぱりもともとあるのです。書物の名前を幾つか挙げましたが、『考古篇』とか、『考古質疑』とか、『考古文集』とか、『考古類篇』とか、このような書名ものがあります。これはもちろん、私が調べたものではなく、^{せきのたけし}関野雄先生が調べられたものですが、これに使われているこの「考古」とい

う言葉はその内容を見ても、「文献によっていにしえを考える」という意味での「考古」で、現在の我々が使っている「考古」の考古学は文献ではなくて、遺跡や遺物、遺跡といった具体的な物から考えるというものです。

ですがまあ、この当時は、中国では書物を読んで覚えることが学問であったわけで、昔を考えるということについても、書物を読むことによって昔を考える、学ぶというのが当然だったと思います。そういう「考古」でないものも探してみますと、呂大臨^{ろたいりん}という人の書いた『考古図』という本が宋の時代に出てまして、この中身は、それまでに使っていた古い銅器とか玉器、それを集めた本で、その出土地だとか、誰が持っているだとか、そして、ものそのものの、形や大きさ、文様など、図ですね、特色それから銘文があるものについてはその拓本を載せて、その拓本の釈文を載せるというようなものです。まさに考古学、現在の我々が行っている考古学の理屈、資料の報告の仕方と、まあ、同じとは言いませんけど、近いことを行っている。つまりモノによって年代を考証する、考える。まさに現在の考古学の意味と同じです。で、これがやっぱり日本に多数、輸入されていて、こういったモノによって物を考えるという『考古図』の考え方、というのがヒントになって、明治初期の知識人達の間で、考古学という言葉が使われるようになったんだろうということですよ。

だから、まとめますと、呂大臨^{ろたいりん}の『考古図』、これはあの、日本に輸入されていますので、その『考古図』による考古という考え方が、考古学という中に入っている。それで、日本で一般化して、中国に逆輸入されていって、中国でも使われるようになった。まあ、そういう結果なの、「博物館」と同じような結果かなあ、と。

それから、もう一つ、発掘、これも原語がありまして、**excavation** という英語の翻訳が、発掘。**excavation** という言葉を翻訳して、発掘という言葉が使われている。この発掘という言葉は、今は我々はあまり感じない事かも知れませんが、もともとはあまり良くない意味なのですね、ニュアンスが。特にここに挙げた例で、明治 7 年の太政官のお達しで、「上世以来後陵墓ノ所在未定ノ分、即今取調中ニ付、各管内荒蕪地開墾ノ節、口碑流传ノ場所ハ勿論、其他古墳ト相見エ候地ハ猥リニ発掘為致間敷候…」というような、まあ、陵墓、陵墓と言うのが天皇の墓、開発行為なんかのときに気を付けろ、と、ここは陵墓だよ、あるいは古墳だよ、蓋^{ふた}を開けていい所か、気を付けろ、と。「猥リニ発掘為致間敷候」、猥^{みだ}りの語が付いてるように、この発掘というのは、まさにお墓^{あば}を暴いて掘るという意味なので、今の言葉でいうと、盗掘、盗掘よりももっと悪い、暴く、暴き掘る、という意味。これが中国でのもともとの意味になるのですね。

もともとの意味というのは、中国の古典の中での使われ方にこんなものがありまして、前漢^{おうもう}の王莽が太后の塚を発掘し、其の璽綬^{じじゆ}を奪う（「王莽…発掘傳太后丁太后冢、奪其璽綬…」）、王莽という人は前漢と後漢の間に、「新」という王朝を建てたのですが、中国の歴史の中では悪い奴の代表みたいな人で、漢の王室を篡奪した、ということをいわれるような人で、これが、前漢の王室の太后ですから、漢の王室の奥さんたちの墓を暴いて、中か

ら璽綬を奪うというから、玉とかなんかの貴重品を取ったのです。

それから、『三国志』の魏志董卓伝ぎしとうたくでん、「董卓…焚焼洛陽宮室、悉発掘陵墓、取宝物…」。董卓も中国の歴史の中では、悪い奴の代表ですね。漢の後漢の洛陽の宮殿を焼いて、陵墓というから、王達のお墓を暴いてるといふ宝物を取り出している。こういった中国の歴史上の悪い奴がやったことというのが、「発掘」ということ。それから『後漢書』の『謝夷吾伝』に、「漢末当乱、必有発掘露骸之禍」。漢の混乱期にお墓などが暴かれて「露骸之禍ろがいのか」ですから、お墓の中に葬られているものが、剥き出しにされてしまったと、そういうのが書いてある。そういうところから見るとですね、発掘という意味はもともと盗掘とか、もっと悪い意味で、墓を暴いて掘る、暴くだけでなく、宝物を盗む、ということまで言った。墓泥棒が墓を盗掘して暴く、こういう言葉の意味なのだったようです。

ところが日本では、この発掘という言葉つぽいしやうごろうを、坪井正五郎つぽいしやうごろうなんか、考えて使っています。この坪井正五郎という方は、先程、紹介した日本人類学会を最初に指導していた人で、いろいろ面白いことをしまして、日本列島の先住民に関しての論争を繰り広げました。坪井正五郎の主張というのは、日本列島の先住民というのは、アイヌ民族の伝説の中に出てくるコロボックルだ。北海道旅行された方は、あちこちでコロボックル人形を売っているのをご存じでしょうが、なんでそんなこと言い出したのか、っていうと分かんないのですが、このコロボックルが先住民だ、というのです。さっきも言ったように、坪井正五郎は人類学会を代表する人ですから影響力がかなりある。坪井正五郎が言うんだからそうかなあ、と思う人、多分居たのでしょ。だけど、そうでない人もいて、いや、コロボックルでないという人もいて、明治時代を通じて、日本人の先住民に関する論争がありました。おかげで、考古学的な情報が随分出ることになったのですが、最後に坪井正五郎は、ロシアの当時ロシアのペテルブルク、今のサンクトペテルブルクで死んでしまいます。別に流されて死んだんじゃないで、そこで行われている、学会に参加する中で、客死しました。それとともに坪井正五郎のコロボックル説というのは、消失してしまうことになります。もともと理系の人ですので、言葉を使うのにあまり頓着しなかったのか、私の想像ですけども。坪井は最初から発掘という言葉を使っていました。明治20年の理学協会雑誌で、足利古墳発掘を報告しますが、これが発掘という言葉が、学術的な意味で使われた最初らしい。ただ、その前の年に人類学会の人類学報告の中で、渡瀬莊三郎わたせしやうさぶろうという札幌の方が、「北海道後志国に存する環状石籬」という報告をしている。環状石籬かんじやうせきり、石がぐるっとまわっている、ストーンサークルを「発掘」して、土への「堀」を書いている。多分これは誤植だろうと思うのですが、これは誤植であるならば、ですね、こちらの渡瀬莊三郎の方が初出、とすることになりますけれども、ちゃんと活字として残っている中では、坪井正五郎が最初でした。

人類学会の中では、この、発掘という言葉を使い換えて、本来の暴き掘るといふような意味を離れて、学術的な意味に使われて一般化していきます。

では、中国での状況はどうか、先程、紹介しました袁復礼えんふくれいの『中華遠古之文化』『奉天錦

西県沙化鍋屯洞穴層』の、これ、それぞれの本の中で、これ翻訳ですから、excavation という言葉が出てくる。それを、袁復礼は、採掘というように表記したり、それから「^{アツ}掘」、この、手へんに穴かんむりの「^{アツ}挖」という字を使っています。これ、日本語に無いのですね。一生懸命探したら、「アツ」というふうに日本語では読むというのですが、中国ではwaと読むのです。「^{アツ}掘」「^{アツ}挖」とかいうような表現をしていました。

李^{りきい}濟という方の『西陰村史前的遺存』、これ 1926 年の本なのですね。この本でも、まだ excavation に相当するところは、「^{アツ}掘」挖 wa という言葉を使っていました。それが、その 3 年後の 1929 年に出されました『安陽^{アツ}発掘報告』、これは中国の殷の都、たくさん青銅器が出て来た発掘報告で、この書名から分かる通り、「^{アツ}発掘」という言葉が使われました。中国では始めて「^{アツ}発掘」という言葉が、学術的なものに始めて使われています。ですがこの報告書の本文中では、「^{アツ}掘」という言葉がほとんどです。その 5 年後の『^{じょうしがい}城子崖』という報告書の中ではもう全て、「^{アツ}発掘」という言葉が使われていきます。「^{アツ}発掘」が使われなかった理由というのは、さっきお話したのですが、こういうような悪い意味の言葉、盗掘とか墓を暴く、そういうもとの意味を知っていた袁復礼・李濟、学者・研究者です。この言葉に対しても、ちゃんと元々の意味を知っていて、「^{アツ}発掘」の言葉を使わなかった。

それで、中国の文化を受け入れて伸長してきた日本の文化の中でも、最初のうちは、「^{アツ}掘」というのを、そういう悪い意味で使っていて、太政官でも暴き掘るという意味で使っていた訳ですね。ところが日本の研究者の中で、坪井正五郎を中心とする人達の中で、「暴く」ではなくて、^{アツ}発掘の「^{アツ}発」は、^{アツ}発明の「^{アツ}発」ですね。だから、^{アツ}発明するとか、新しいことをするという意味になる訳で、暴く、暴いて掘る、というのでなくて、「明らかにして掘る」というふうに言葉の意味を変化させていって学術用語にして使うようになっていって現在に至る。また、中国でも、日本の大勢に押されて、日本と同様に、調査、考古学の調査という言葉として^{アツ}発掘という言葉を採用していったということです。

だからこれも、中国にもともとあった言葉を日本で明治時代に意味を変化させて使うようになった。それが、中国に逆輸入されていったと、そういう動きを見ることはできるんじゃないか。^{アツ}発掘もそれから考古学も博物館も、もともと中国の言葉にあった。それを日本で汎用化する、あるいは意味の一部を取り出す、あるいは意味を変化させるということをして、使われるようになってきた。そして、それがまた中国に戻って、中国で使われるようになった。それは、^{アツ}発掘、考古学、博物館、これだけじゃなくて、非常に多くの言葉が、こういうふうになっているのですね。

中国、「中華人民共和国」といいますが、「共和国」なんて語も多分、日本語、日本からなのでしょうね。こういうのが言葉の変化、明治時代の人達というのは、こうやってみると、すごいなあ。明治維新の頃の文化、言葉の面でも創造性を感じるわけです。

というわけで、今日のお話しはこれくらいで終わりに致します。

(拍手)

司会：「皆様、ご静聴…」